

「第9回 TSR 総合調査」報告書

【概要版】

教学 IR 推進部会 TSR 総合調査 WG

(EM 研究所分析)

令和5年4月～令和6年2月調査



令和6(2024)年3月

1 はじめに ー第9回 TSR 総合調査報告書完成にあたりー

TSR 総合調査 WG 長
学長 神達 知純

ここに第9回 TSR 総合調査報告書をお届けします。

本報告書は令和5年度に実施した第9回 TSR 総合調査の結果を報告するものです。第9回調査では、大正大学在学学生、大正大学卒業生、企業等を対象とする調査を実施しました。結果の詳細につきましては本報告書の「概要」「結果」をご参照ください。

大学の教学マネジメントには、基礎となる情報を収集・分析する体制が不可欠です。教学 IR はその役割を担うものであり、令和2年に文科省が公表した「教学マネジメント指針」にも教学 IR の体制を整えることの重要性が示されています。

大正大学においては、平成26年に総合 IR 室(現在の EM 研究所)が設置され、以来、情報の収集・分析等をおこなってきました。また、平成27年から TSR 総合調査を毎年実施し、その調査結果は本学における教育の質保証、ブランディング戦略等に活かされています。そして、令和2年には学長を部会長とする教学 IR 推進部会を立ち上げ、IR による教学運営の体制を強めてきました。

教学 IR 推進部会の発足は、上述のような国の方針に沿ったものですが、前学長の高橋秀裕先生の強いご意向によるところでもありました。高橋先生は合理性のある根拠に基づいた教学運営にお力を傾けられ、学内に IR 文化を醸成したいと常日頃から仰っておられました。データサミットの開催、内部質保証の取り組みにおけるデータの活用等は高橋先生のご意向によって始まったものです。

高橋先生は昨年10月末をもって学長を退任され、その後、神達知純が学長に就任しました。私は教学担当副学長として教学 IR 推進部会に参加しており、本学における教学 IR の可能性と課題については理解しています。前学長が立ち上げられた体制を発展継承していきたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

さて、学長に就任してからの最初の仕事として、私は「建学の理念に基づいた新しい学力観<「4つの人となる」ための10の力>」を公表しました。昨今、学修者本位の教育への転換が謳われ、学修成果の可視化を組織的に実現することが大学に求められています。私が公表した「10の力」は学生が大学で身につける資質・能力を明示したものです。学修成果の可視化を図るためには、まず目標となる資質・能力を明確にすることが肝要であると考えました。すでに「10の力」に基づいた教育が展開されていますが、教学 IR の視点から情報を収集・分析・検証し、合理性ある教学運営に努めていく所存です。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた皆様に、この場をお借りいたしまして心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。今後とも同調査にご理解ご協力の程よろしく願いいたします。

*なお、これまでの TSR 総合調査の結果と分析については、大学の HP 上で公開されておりますのでご参照ください。

<https://www.tais.ac.jp/guide/estimation/#info04>

2 第9回 TSR 総合調査結果の概要

第9回 TSR 総合調査では、調査対象とする本学のステークホルダーを、当初、高等学校、本学在學生（学部生）、本学大学院生、本学卒業生、企業として、調査を開始した。しかしながら、学部・学科改組のための高校生を対象とするアンケート調査を企図しており、高等学校側の負担を軽減するためにも、今年度も高校調査については中止することとなった。大学院生の調査については、今年度より本格実施を行うこととなった。

在學生（学部生）調査については、昨年度までとは異なり、ウェブ方式による調査とマークシートによる調査の併用ではなく、ウェブ方式による調査のみで実施した。各学科事務室等の協力を得ることなど、例年通りの努力を重ねたが、回答率は 53.1%と昨年度より 10.5 ポイント低下した。

大学院生調査は、今年度より本格実施を行うこととなったが、在學生（学部生）調査と同様にウェブ方式による調査のみで実施した。その結果、回答率は 31.5%と高くない割合であった。

卒業生調査については、昨年度同様に卒業生課及び鴨台会（本学同窓会）の協力を得て、全卒業生（鴨台会会員）を対象に実施した。この理由は、卒業生調査の実施には、これまで郵送等の調査実施コストが大きな課題であったため、毎年度初めに卒業生課が鴨台会会員向けに郵送する諸資料等に調査依頼書、調査票を同封し、web 及び FAX での回答を依頼することでコストの解消を図ったためである。ただし、この方法では、昨年度の回答数は 508 件、今年度の回答数は 283 件のみと、回答率は極めて低いものとなった。今後、当該調査方法自体の改善が必要である。

企業調査については、本学卒業生の就職先である企業等を対象とし、昨年度までと同様に、一般社団法人日本能率協会に調査実施・分析の一部を委託し、DM 便による調査依頼と、ウェブ方式でのアンケート調査という調査形態で実施した。回答率は 16.7%と、前年度までと比較して若干低下した。アンケート調査に加えて、一部企業については、これも前年度までと同様にヒアリング調査も実施した。

以下では、それぞれの調査方法の概要の説明は割愛し、調査結果の概要のみ記載する。

2-1 本学在學生（学部生）を対象とする調査について

本学在學生（学部生）を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 本学の志望順位の経年比較では、高校3年4月段階、受験時の両方で、第6回調査までは、年度が新しいほど第1志望率が低下し、第2志望以下の合計の割合が上昇していたが、第7回調査から反対に第1志望率が上昇しており、第9回調査でもこの

傾向が続いている。2020年度以降の入試では、入試倍率が下降したことが原因で、結果として入学者の第1志望層が増加したことが考えられる。

- (2) 入学時の進路先としての本学の総合的な満足度の経年比較では、第7回調査までは満足度は上昇していたが、第8回調査では前年度調査より低下し、第9回調査では、再び前年度より上昇した。近年の調査では、安定的な傾向が見られなくなりつつある。
- (3) 入学後現在までの大学生活の総合的な満足度の経年比較についても、(2)と同様の傾向が見られる。すなわち、第7回調査までは、満足度は上昇していたが、第8回調査では前年度調査より低下し、第9回調査では再び前年度より上昇している。
- (4) 入学後現在までの大学生活の総合的な満足度について、例年の傾向としては、学年が上がるごとに満足度は概ね上昇していたが、第9回調査では、4年生の満足度が最も高いことは例年と変わらないが、2年生よりも1年生の満足度が高く、3年生と同程度の割合であった。1年生の第1志望の割合が高まったことが理由と考えられるが、第8回調査、第9回調査とも、1年生の第1志望率は前年度調査よりも上昇している。
- (5) 入学時に本学へ期待していたことは、8年間一貫して、「専門的な学問を修得することへの期待」が最も高く、「将来の目標や夢を発見することへの期待」「資格を取ることへの期待」が続いている。「専門的な学問を修得することへの期待」の割合について、第8回調査では39.3%であったところ、第9回調査では、34.7%と5ポイント近く低下しており、今後この傾向には注視が必要である。
- (6) 入学時に期待していた項目に対する入学後の所感では、「期待以上だった」と「期待通りだった」と「まずまず期待通りだった」の合計の割合は、第7回調査までは上昇を続けていたが、第8回調査では初めて割合が低下していた。第9回調査では、全てポジティブな方向に変化し、「期待以上だった」「期待通りだった」「まずまず期待通りだった」のそれぞれの割合に加え、両者の合計の割合も、本調査開始後最も高い割合となった。
- (7) 大学生活上の18項目に対する満足度について、第8回調査よりも、満足度が上がった項目は16項目であり、殆どの項目で満足度が上がった。第8回調査とほぼ変わらなかった項目が1項目、第8回調査よりも下がった項目は1項目のみであった。
- (8) 入学後現在までの大学生活での成長実感の経年比較では、「とても得られたと思う」と「まずまず得られたと思う」の合計の割合の順序は、第5回調査までは、高いものから一貫して「専門性の向上」「教養の広がり」「人間的な成長」「社会で生き抜く力」の順であった。第6回調査では「教養の広がり」が最も高い割合となり、第7回調査では僅差で「専門性の向上」が最も高くなったが、第8回調査では再び「教養の広がり」が最も高くなり、第9回調査も同様であった。入学する時の期待も入学後の満足度も、専門に関する項目の割合が最も高いが、成長した実感では、教養に関連

する項目が最も高くなっているとも言え、近年の I 類改革の成果の可能性が示唆される。

- (9) 入学後現在までの大学生活を経験して、本学が社会から信頼される良い大学だと思うかという質問に対し、「大変信頼できる」と「ある程度信頼できる」の合計の割合の経年比較では、それまでは年々上昇傾向にあったが、第 7 回調査において初めて前年度より割合が低下していた。一方で、第 9 回調査では、この割合が上昇に転じた。

本学の推奨度については、第 6 回調査をピークに低下傾向にあったが、第 9 回調査では、3 年ぶりに前年度から上昇した。

- (10) 学生生活の不安に関しては、第 8 回調査から加えた設問であるが、全体としては、不安が選択される割合が高いものから順に、「授業についていけるかという不安」「経済的な不安」「友人関係をうまく作れるかという不安」と、ここまで 10%以上であり、概ね 10 人に 1 人程度か、それ以上が選択していることがわかる。ただし、これらの項目は第 8 回調査では約 20%以上の割合で選択されていたため、前年度調査から不安に感じている割合が低下したことが分かる。

2-2 本学大学院生を対象とする調査について

本学大学院生を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 大学院進学理由は、「研究への情熱／興味のため」、「専門知識やスキルの獲得のため」、「将来のキャリアのため」が、順に上位 3 項目である。
- (2) 入学時の進路先としての満足度と入学後現在までの総合的な満足度について、入学時点ではポジティブな回答が 9 割に近く、この傾向は、現在までの総合的な満足度と同様であり、満足度は高いと言える。一方で、「大変満足」だけに着目すると、現在までの総合的な満足度は、入学時点よりも明確に低いため、これは課題であると考えられる。
- (3) 現在の自分自身の研究の満足度については、「大変満足」と「ある程度満足」の合計の割合は約 7 割強である。一方で「どちらでもない」は約 2 割である。
- (4) 「指導教員との関係」「研究に必要なリソース（施設、機器、データなど）」「学費や奨学金のサポート」「就活やキャリア支援」の各項目の満足度は、ポジティブな回答がそれぞれ約 9 割、約 8 割弱、約 4 割、約 2 割強である。教育研究に関する項目の満足度は高いが、学生支援の満足度はあまり高いとは言えない。しかしながら、「学費や奨学金のサポート」「就活やキャリア支援」については「どちらとも言えない」が約半数以上を占め、ネガティブな回答の割合はそれほど高くはない。
- (5) 卒業後の進路希望については、研究職に関連する回答の割合が高いが、一般の専門職をめざすものも一定程度見られる。

- (6) アカデミックなコミュニティや交流の場の充実度については、6割強の者がポジティブな回答をしている一方で、約2割弱がネガティブな回答である。
- (7) 留学や国際交流の機会の充実度については、1割強の者しかポジティブな回答をしておらず、在学生（学部生）調査とも同様の傾向であり、本学の課題である。
- (8) 大学院生活において、メンタルヘルスのケアを重視する学生の割合は約7割弱である。ストレスや不安の要因では、「修士論文や博士論文の執筆」の他、「就職やキャリアに関する不安」も半数を超える回答があった。「学業との両立」や「経済的な負担（奨学金や授業料等）」（13件、同27.7%）、「対人関係の問題」も3割前後選択されている。
- (9) 大学院において必要な能力・資質は、「専門的知識」「コミュニケーション能力」「課題設定・検証能力」「批判的思考力」「倫理性」の順に選択されており、大学院においても、リテラシーだけではなく、コンピテンシーも必要であることがわかる
- (10) 大学院入学後、現在までの教育課程を通じて、所属する研究科専攻のディプロマポリシー（DP）に基づく能力・資質等が身に付いたかについては、「知識・技能」「関心・意欲・態度」「思考力・判断力・表現力」共に、概ね8割を超える者が身に付いたと認識している。この3者では、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」よりも「関心・意欲・態度」が身に付いた割合の方が高いことが注目される。

2-3 本学卒業生を対象とする調査について

本学卒業生を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 本学入学時の期待として最も多いのは「専門的な学問や研究を深める」であり、次に、「資格を得る」、「将来の目標や夢を実現する力をつける」、「一般教養を深める」、「幅広い人間関係づくり」と続いている。次の「将来の目標や夢を見つけること」までを、4人に1人以上が選択している。
- (2) 試験期間や長期休暇中などを除く日常的な大学生活における時間外の週あたり学修時間は、最も多いのは「1～5時間程度」、次に、「6～10時間程度」、「0時間」の順であり、概ね平日1時間以下の学修時間が最も多いという結果であった。一方で、概ね平日2時間以上の学修時間である11時間以上の回答は合計で約15%弱であった。
- (3) 学生時代に力を入れた活動で、最も多いのは「大学での勉強」、次に、「クラブ・同好会・サークルなどの課外活動」、「アルバイト」、「趣味」、「遊びやレジャー」と続き、ここまでを概ね4人に1人以上が選択しているが、その他の項目は20%を超えない。その中で、最も力を入れた活動も聞いているが、この順位も、殆ど変わらない結果であった。
- (4) 本学で修得・達成出来たことで、最も多いのは「幅広い人間関係を得た」であり、次に「専門的な学問や研究を深めることが出来た」、「資格を取ることができた」、「一

般教養を深めることができた」であり、ここまでする3人に1人以上が選択している。その中で、最も力を入れ修得・達成出来たことも聞いているが、「幅広い人間関係を得た」と「専門的な学問や研究を深めることが出来た」の順位が入れ替わっているだけで、他の順位は殆ど同じであった。

- (5) 本学入学前の期待と比較した入学後の評価で、最も多いのは「ある程度期待通りだった」であり、その次に「期待以上または期待通りだった」と、ここまでのポジティブな回答の割合は80%を超えている。一方で、ネガティブな回答の割合の合計は6.4%であった。
- (6) 本学の教育に関する20項目への評価では、高いものから5項目挙げると、「歴史・伝統がある」、「校風・雰囲気が良い」、「専門教育が充実している」、「信頼できる大学である」、「熱心な教員や丁寧に指導してくれる教員が多い」であった。一方で、評価が低いものから5項目を挙げると、順に「世間一般的に、入試の難易度が高い」、「世間一般的に、知名度が高い」、「ITを活用した教育が充実している」、「情報発信力がある」、「就職や進学支援が充実している」であった。ただし、「就職や進学支援が充実している」は回答者の年代が若いほど順位が上がっていた。
- (7) 本学での経験の現在の仕事に対する役立ち度では、「大変役に立っている」、「ある程度役に立っている」の割合の合計、すなわち、ポジティブな回答の割合の合計は80%を超えており、高い役立ち度と言える。
- (8) 現在の仕事の状況は高い割合から順に、「民間の会社・団体職員」、「寺院関係」、「パート・アルバイト」が3位までと高かった。ただし、若い年代ほど「民間の会社・団体職員」が高く、逆に、高い年代ほど「寺院関係」の割合が大きい。現在の仕事の満足度は、「大変満足」、「ある程度満足」のいずれかを回答した者が4人に1人以上という割合であった。
- (9) 現在の暮らし・生活の幸福感は、「大変（幸福感を）感じている」、「ある程度（幸福感を）感じている」の割合の合計は80%を超えており、ポジティブな回答が多くを占めた。
- (10) 本学での学び直しのニーズでは、「ぜひ学びたい」、「ある程度学びたい」の割合の合計が約6割であった。そのうち、どのような内容を学びたいのかを聞いた結果では、高いものから順に「文化教養」、「心の問題」、「地域問題」、「社会福祉の問題」、「社会問題」であり、「語学」や「データサイエンスやIT技術」はそれよりも少ない割合であった。

2-4 企業等を対象とする調査について

企業・団体・官公庁等を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 本学卒業生が企業等の人材ニーズや期待に応じているかという設問に対しては、「十分応えている」39.9%、「ある程度応えている」47.2%と合計87.1%の企業等がポジティブに評価している。一方で、不足しているというネガティブな評価の合計は2.2%であった。昨年度調査では、「応えている」合計85.5%、「不足」の合計2.4%であったため、ポジティブな評価は微増、ネガティブ評価は微減したが、概ねこれまでの調査と変化のない結果であった。
- (2) 本学卒業生の能力についての設問に対しては、「総合的に見てかなり高いと感じる」12.9%、「総合的に見て、やや高いと感じる」48.9%と合計61.8%の企業等がポジティブに評価している。一方で、低いという評価は合計で3.9%であった。昨年度調査では、「高い」の合計が67.0%、「低い」の合計が2.4%であったため、「高い」の割合は5ポイント低下し、「低い」の割合が微増するという結果であった。
- (3) 本学の就職支援活動への所感については、「大変熱心だと感じる」28.1%、「ある程度熱心だと感じる」33.7%と合計61.8%が、ポジティブに評価していた。昨年度調査では、ポジティブの割合の合計が55.8%であったため、昨年度調査よりやや上昇した。
- (4) 本学卒業生の採用意向については、「他の大学よりも、大変積極的に考えたい」は28.1%、「他の大学よりも、ある程度積極的に考えたい」は26.4%とポジティブな回答が54.5%と半数以上の企業等を占めた。ただし、「他の大学と同様のレベルで考えたい」が31.5%と最も高い割合であった。昨年度調査と比較して、ポジティブな回答の合計の割合は6.9ポイント増加した。
- (5) 企業等が新卒採用時に重要であると考える点と本学学生の印象では、多くの項目で、重要度より印象の方がネガティブな傾向にあるが、その中でも、特に、差が20%以上大きい項目は順に、「リーダーシップや部下指導」(34.2%)、「困難な問題に取り組む能力」(29.2%)、「柔軟な対処」(28.1%)、「中長期視点から自分のビジョンやキャリアを考えている」(27.5%)、「仕事全般への幅広い興味」(21.4%)、「データを活かした問題解決」(20.8%)であった。昨年度調査と比較して、各項目の差異の割合は若干であるが小さくなっている。一方で、重要度よりも本学学生の印象がポジティブな項目は2項目であり、順に、「専門知識」(22.5%)、「人柄が温厚」(1.7%)であった。昨年度調査では、「幅広い教養」も加え3項目だったところ、1項目減少した。
- (6) 本学が取り組んでいる就職支援活動をまとめた8項目中、企業等が新卒採用に有用だと評価するのは、比率が高いものから順に、「企業・業界研究」(80.3%)、「面接試験対策」(79.2%)、「キャリア・アドバイザーによる個別相談」(76.4%)、「インターンシップ」(75.8%)、「企業人等によるキャリア講座」(70.8%)であった。昨年度調査と上位5項目は同様であるが、昨年度調査で4位であった「面接試験対策」が約5ポイント割合を増やし2位となった。「企業・業界研究」の有用度が常に最も高いことは、一貫して変わらない傾向である。

- (7) 本学との交流に関する所感については、これまで実績がない企業等の場合、「本学学生のインターンシップの受け入れ」について「今後、検討したい」が40.6%と最も高い割合であった。次に、「アルバイト募集や雇用」が29.7%、「本学への講師等の派遣」が28.1%、「PBL等の教育協力」が18.4%、「本学の施設の利用」が17.0%と続く。「寄附講座の開設や寄附金の提供」も10.9%と、これまで実績のない企業等の10社に1社が、「今後、検討したい」と考えていることが分かった。
- (8) 本学採用担当者向けHPが「他の大学と比較して、総合的にみて、利便性が高い」という設問に対し、「大変そう思う」17.0%、「ややそう思う」53.2%と合計70.2%がポジティブに評価している。昨年度調査では、ポジティブの割合の合計は66.7%であったため、やや上昇した。
- (9) 企業等の新たな採用形態の状況としては、「インターンシップを活用した採用」については、合計52.2%の企業等が「積極的に実施」しており、25.8%の企業等が「現在より拡大する」と回答している。その他では、「拡大する」と回答した比率が多いものから順に、「広義のリファラル採用」23.0%、「通年採用」17.4%、「ダイレクトリクルーティングや逆求人採用等」13.5%、「勤務地域限定の採用」5.1%であった。昨年度調査との比較では、「通年採用」を除く全ての採用活動について、今後より拡大する方針の割合を増加させており、これには人口減少によるいわゆる「売り手市場」が影響を与えていると考えられる。
- (10) 新型コロナウイルス感染症の影響について、これまでの3年度の対比では、「大きな影響を受けている」の割合は2020年度18.7%、2021年度13.3%、2022年度7.8%と減少を続けていたが、2023年度は再び13.5%と10%を超えた。一方で、「大きな影響を受けている」と「ある程度の影響を受けている」の合計の割合では、今年度は46.1%であり、この4年間では減少を続けている。

【教学 IR 推進部会】

<2023 年 10 月 31 日まで>

部会長	学長	高橋秀裕
副部会長	副学長	神達知純
委員	副学長	首藤正治
	学長補佐（代表）	小林伸二
	学長補佐	星野壮
	学長補佐	村上興匡
	学部長（代表）	高橋正弘
	EM 研究所所長	福島真司
	EM 研究所副所長代行	日下田岳史
	担当部長	島村富雄
	担当部長補佐	加藤真紀子
	担当課長	福中裕之
	EM 研究所	和田浩行（オブザーバー）

<2023 年 11 月 1 日から 2024 年 3 月 31 日まで>

部会長	学長	神達知純
副部会長	副学長	山内 洋
委員	副学長	白土 健
	学長補佐（代表）	小林伸二
	学長補佐	佐々木大樹
	学長補佐	高柳直弥
	EM 研究所所長	福島真司
	EM 研究所副所長代行	日下田岳史
	担当部長	島村富雄
	担当部長補佐	加藤真紀子
	担当課長	福中裕之
	EM 研究所	和田浩行

教学 IR 推進部会 TSR 総合調査 WG 開催日時（合計 5 回開催）

2023 年度：第 1 回 5 月 10 日、第 2 回 6 月 28 日、第 3 回 8 月 4 日、
第 4 回 10 月 19 日、第 5 回 3 月 12 日